

モデルコース①

宿場の面影を辿る上野原四宿と下鳥沢宿・上鳥沢宿コース

相模国から境川を渡り諏訪の番所で厳しい取り締まりを通過すると、甲斐国最初の宿場である上野原宿に到着します。養蚕と織物業が盛んであったこの地では、商家が軒を連ね、毎月1と6が付く日には市が開かれたといわれます。現在も賑わいは変わらず、酒饅頭を蒸す香りやレトロな食堂や商店が旅人を迎えてくれます。道を脇にそれて上野原城跡や中央自動車道沿いを歩いた後、JR上野原駅に戻る簡易なルートでも往時の面影に少しばかり触れることができます(モデルコース①-1)。

さらに旧道をたどって鶴川を越え鶴川宿へ。ここでは村のほとんどが宿屋を経営していたといひ、街道筋にはその名残が見られます。その先の野田尻宿は、旧宿場町の面影を今も色濃くとどめています。宿場町の出入口付近を歩くとほぼ直角に曲がる道に出会いますが、見通しを悪くして敵の攻撃を防御する役割だったといわれています。葛飾北斎や歌川広重の浮世絵で知られる犬目宿は、甲斐国に入って最初に富士山を眺めることのできる場所です。そこから南に下ると、趣ある家々が立ち並ぶ下鳥沢宿と上鳥沢宿が見えてきます。各宿場の佇まいを比べたり、途中の一里塚や古戦場の痕跡などを確認しながら、旧甲州街道探訪を楽しむことができます(モデルコース①-2)。



うまのはら
上野原宿

甲州街道、甲斐国最初の宿場。1742(寛保2)年から1907(明治40)年まで、毎月1と6が付く日に市が立っていました。郡内地域の農家は、農耕の傍ら家内工業的に絹や紬を織っていたため、市では荒物や日用品の他、こうした織物が集められて盛んに取引されていました。市には相州や八王子から多くの仲買人が訪れて賑わいを見せていました。



つるかわ
鶴川宿

甲州街道、甲斐国2番目の宿場。鶴川を渡ったすぐ先にあった宿場町で、「一村一宿」といって、村のほとんどの家が宿屋を経営していました。本陣はなくなってしまいましたが、現在も各家には宿屋の屋号が残り、表札などに書かれたものを見ることが出来ます。



のたじり
野田尻宿

甲州街道、甲斐国3番目の宿場。江戸から見て鶴川宿の次の宿場に当たり、中規模の宿場町として江戸から明治にかけて大いににぎわいました。本陣と脇本陣が各1軒、旅籠が9軒並んだ宿場の全長は400mほどで、出入口の道がカギ型になっているのが特徴です。上野原市内の宿場に見られるカギ型の道は、防御のためにわざと道幅が狭く、見通しが悪く造られています。



いぬめ
犬目宿

甲州街道、甲斐国4番目の宿場。郡内地方で最も標高が高いところにあります。本来は、現在の位置より700m南に集落があったといわれていますが、1713(正徳3)年に人気のない地域に新たに設置されました。宿場通りの西に位置する犬鳴神社と宝勝寺が、西からの侵略を守っており、江戸防衛のための戦略的な構えとなっています。1836(天保7)年に起きた甲州一揆(郡内騒動)を率いた犬目村の兵助の古里であり、宿場の東側の高台に墓が残っています。この墓からは、富士山と郡内の山々が一望できます。

諏訪の番所跡

甲州街道において甲斐国に出入りする人や物を取り締まる番所があった場所。1707(宝永4)年に諏訪神社の前から東の乙女坂に移転し、近くを流れる境川にちなんで境川番所とも呼ばれていました。江戸時代、この番所を通じて江戸へ入るには、女性のみ手形が必要でしたが、これは地方都市に派遣された勤番士の妻子が江戸に戻らぬよう、厳しく監視したためといわれています。建物は明治18年に洪沢栄一氏が買い取り、東京飛鳥山の本部に隣接する分園の別荘として移築されています。



の人の看病に感謝した老婆は「痘瘡神を祀れば必ず、疫病から逃れられる」と言い残して亡くなったそうです。人々は、老婆の出身地で、痘瘡神を祀っている湯尾峠(現在の福井県南越前)の痘瘡神社に行って分霊を迎え、1661(万治4)年にこの神社を造りました。神社には「痘瘡婆さん」と呼ばれた老婆の小さな木像が祀られています。(普段は非公開/特別公開される場合あり)。境内の奥には、塚場の一里塚跡が見えます。

痘瘡神社

痘瘡が旧上野原村に入ってこないようにと建立された神社。江戸初期に諸国を巡っていた老婆がこの地区で倒れ、地域の人々の看病に感謝した老婆は「痘瘡神を祀れば必ず、疫病から逃れられる」と言い残して亡くなったそうです。人々は、老婆の出身地で、痘瘡神を祀っている湯尾峠(現在の福井県南越前)の痘瘡神社に行って分霊を迎え、1661(万治4)年にこの神社を造りました。神社には「痘瘡婆さん」と呼ばれた老婆の小さな木像が祀られています。(普段は非公開/特別公開される場合あり)。境内の奥には、塚場の一里塚跡が見えます。

旧道の面影を残す石畳

恋塚集落の西端に石畳が敷かれた道がわずかに残っています。石畳は江戸時代の道路舗装の手法で、この石畳も江戸前に敷かれたものとされており、付近の農民が駆り出され、河原から石を運んできたという見方もあります。この近辺では以前、西光寺の裏や犬目宿の東端などにも石畳道が残っていましたが、舗装されたため、現在残っているのはこの場所だけになりました。往時の街道の風景が楽しむことができます。



モデルコース②

名画に描かれた道を往く下鳥沢宿から猿橋宿コース

犬目宿を越えて下っていくと、当時の面影を残す宿場が見えてきます。この下鳥沢宿は、続く上鳥沢宿と分担して宿場を運営していました。かつては上鳥沢宿が毎月15日までを、下鳥沢宿が毎月15日以降を担当して行き交う人々をもてなしていました。上鳥沢宿から少し歩くと見えてくるのが猿橋です。日本三奇橋の1つであるこの橋は、橋脚を使用せず兩岸から張り出した四層のはね木で支えられているという珍しい構造で、古くから景勝地として名高く、歌川広重の『甲陽猿橋之図』にも描かれています。猿橋を渡ると猿橋宿に入ります。高所に架けられた猿橋と、桂川の造り出した景観は、街道を行く多くの人々を魅了してきました。今も猿橋からつながる遊歩道でこの景観が見られます。また、大月市郷土資料館では、猿橋の構造や往時の宿場町の様子を知ることができます。



しもとりざわ
下鳥沢宿

甲州街道、甲斐国5番目の宿場。西隣の上鳥沢宿とは1kmほどしか離れておらず、「合宿」という半月ごとに宿の役割を交代する形で分担していました。1906(明治39)年の大火で、当時の建物は焼失したため、現在残っている家は明治以降の建物ですが、屋根やひしが大きくせり出した古い構えの家を街道の両側に見ることができます。



かみとりざわ
上鳥沢宿

甲州街道、甲斐国6番目の宿場。下鳥沢宿と、合宿の形をとって、助け合いながら宿場の運営を分担していました。上鳥沢宿が上15日を担当し、下鳥沢宿は下15日を担当したといひます。明治に建てられた「山口家住宅主屋」が往時の姿を残しています。



ざるはし
猿橋宿

甲州街道、甲斐国7番目の宿場。日本三奇橋の一つとして知られる猿橋のそばにあります。比較規模が大きな宿場で、江戸時代には芝居小屋などがありました。猿橋の絶景を眺めるために足を止め、宿泊や休憩をする旅人たちが旅籠や茶屋が賑わったと言われていひます。大月市郷土資料館では、往時の様子を再現したジオラマを見ることができます。



猿橋

山口県の「岩国の錦帯橋」、長野県の「木曾の浅井橋」と並び、日本三奇橋の一つ。長さ30.9m、幅3.3m、高さ31mの位置にあり、そびえ立つ断崖の両岸から張り出した四層の「はね木」によって支えられた、橋脚を全く使っていない特殊な構造をしています。歌川広重の『甲陽猿橋之図』や十返舎一九の『諸国道中金之草鞋』などにもその珍しい構造は描かれています。猿橋公園とつながる遊歩道からは、下から猿橋を眺めることができます。

鶴川

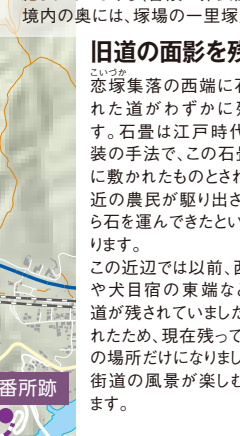
甲州街道上には橋のない川が3つありました。そのうち多摩川と笛吹川は渡し船がありましたが、鶴川だけは「川越人足(川越人足とは、人を背負うなどして川を渡すことを仕事とする人)を置いていました。人足は時には法外な賃金を要求することもあり、甲州街道を行く旅人にとって鶴川の川越人足は、諏訪番所の役人よりも手ごわい存在だったようひです。歌舞伎役者の5代目市川海老蔵も、甲府へ興行に行く際、百両要求された[甲州道中記]に書き残されています。



モデルコース①-1 上野原宿散策コース



モデルコース①-2 六宿踏破コース



恋塚一里塚

甲州街道において唯一、当時の姿を残す一里塚。日本橋から二十一里、21番目の塚です。一里塚は日本橋を起点とする五街道に街道の両側に土を盛って作られました。旅人が距離を測ったり、人夫や馬を借りる際の駄賃の目安になったといひます。北側はなくなりましたが、南側は直径約12m、高さ約5mの塚がほぼ完全な姿で残っています。

野田尻宿



下鳥沢宿



上鳥沢宿



猿橋宿



鶴川宿

